報告者：長谷川健司（東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程）

「〈種-政治 gene-politics〉の言説：北一輝『国体論』の思想史的検討」

（司会：牧野邦昭（摂南大学））

報告概要

　本報告では、北一輝の『国体論及び純正社会主義』（1906年初版、1920-21年修正、以下『国体論』と表記）を主に取り上げ、そのなかで進化論（生物進化論）が受容され消化された軌跡を検討した。その上で、進化論を基盤とした社会変革論から種の統治に関する言説が導出された実態を考察した。

　第1節では、北が動物学者・丘浅次郎の『進化論講話』（1904年）から多大な感化を受けたことの思想史的な意義を分析した。同書は、北が本格的に生物進化論に触れることになった契機であっただけでなく、『国体論』を通貫する人類進化への視座を大きく規定している。ここでは、とりわけ丘における「遺伝」と「競争」の捉え方に着目した。

　『国体論』では、近代国家が種の進化を目的とした管理者的な機関として位置付けられ、その歴史的役割を論じることで具体的な変革論を提起している。そこで第2節では、北の社会変革論における国家を役割を、「種の管理」という視角から分析した。第３節では、規律訓練型の微分的な装置と人口を調整する生権力のテクニックが作動する空間を取り込みながら、種の時間を管理する権力を〈種-政治〉として概念化した。

　第4節では、先行研究ではあまり触れられていない、『国体論』における個人の変革の力についての考察に焦点した。「（国家）権力万能論」とされることの多い北の変革思想ではあるが、その根源には、個人の機智と狡智の力への信頼が大きく寄与していることを確認した。

質疑応答概要

　本報告に投じられた質問は、主に、北が「社会」に変革の力点をおかずに、「国家」を変革の主体であるとしたことの思想史的な意義を質すものだった。この質問は、本報告ではほとんど触れられなかった『国体論』における特異な「社会」観をあらためて考察する契機となった。先行研究では、『国体論』における「社会」は、「国家」と境界不明瞭な人間集団として定位されているとされている。つまり、「国家＝社会」という構図で北の変革論は語られることが多かった。しかし、「種の管理」という観点から再考察すると、北の「社会」観は「国家」へと還元されるほど単純なものではないことが考察された。北は、社会組織の形態と「種」ととしての人間が、相関的に「進化」してきたという特異な社会進化観を提示しており、「国家」をあくまで特殊近代（現在）的な社会形態と位置付けているからである。